外来語としてのカタカナ語と英語教育環境

―― 小学校の教科書に観るカタカナ語表記と小学校英語教育 ――

Katakana and the English education environment:
katakana spelling in elementary school textbooks
and for elementary school English education

山田　隆敏*
Takatoshi Yamada

はじめに

外来語とは、「*Engrish* is a slang term which refers to an English language phrase that arose through poor translation from another language (usually Japanese), or sometimes, poor translation of English into another language followed by good translationback into English. It is usually considered by English-speakers as a humorousmisuse of English. *Engrish* also refers to the deliberately careless or mistaken useof English words in a advertising, for example, as "exotic" embellishment」として定義づけられている。さらに、「The term "Engrish" is a pun on Japanese and a few otherEast Asian languages that do not have separate sounds for R and L. Japanese has asound pronounced with the tongue halfway between an English speaker's L and R, andnative speakers of Japanese often inadvertently reverse L and R sounds whenspeaking English; *English becomes Engrish.*」と説明されている(1)。

ここで本論を大きく四部に大別して考察を試みる。まず、表題の「外来語としてのカタカナ語と英語教育環境」の内で、§1「国際化時代の外来語とは」、§2「英語教育環境と国際理解教育」、さらにサブ表題の「小学校の教科書に観るカタカナ語表記と小学校英語教育」の内で、§3「小学校教科書に観る外来語・カタカナ語表記の実情」、§4「小学校英語教育と日本語」に大別し現状報告を試みる。但し、今回は§1と§3に限って分析報告する。

平成16年9月3日原稿受理　教養部

§1 「国際化時代の外来語とは」

外来語は国際的には借用語（loan word）の一部であり、国内的には俗語（slang word）であり方言の一部・階層方言（stratified dialect）でもある。元来、それは外国語であるが、日本の生活文化に溶け込み、社会階層の一員となった場合、日本の外来語は大きく分けて二部に大別される。一つは、「漢文系（classical chinese civilization）」と、もう一つは、「西欧系（modern western cilization）」のものである。いうまでもなく、歴史的にいって、漢文の生活文化への影響力は図り知れなく、平仮名・万葉がな・カタカナとともに、日常生活に同化しており、今日の我々はもはや漢語を外来語とは見做さない。そこで、今回の外来語は西欧系の外来語について述べることとする。

(1) 西欧系の外来語の使用実態の把握は絶えず流動的な存在のため不可能であるが、三省堂の国語辞典の統計を借用すれば、その収録項目の約10%が外来語の引用にあてられている。

(2) 漢字で表記される表意的なものは意味を理解把握することが出来るけれども、カタカナ語で表記される西欧系の外来語の場合、もとの英単語を想像して理解把握することは困難なケースが多くみられる。例えば、ツーショット（two shot）は個々の単語の意味は解っても、「男女のカップルの映った場面」の意味だとまでは理解把握するのは困難である。

(3) ここで、上記の「はじめに」の引用英文内で用いられているEngrishと同様の使用形態として、主だったもの一部を下記に掲載する[2]。

借入外来語	借入言語・国名	備　　考
Chinglish	China, Chinese	
Dunglish	Netherlands	Dutch-English
Finglish	Finland	
Franglais	France	Canada（Quebec）
Genglish	German	Ginglish, Germish
Hinglish	India, Hindi	
Konglish	South Korea	
Manglish	Malaysia	
Pinglish	Iran, Persian	
Runglish	Russia	
Spanglish	Spain	
Singlish	Singapore	
Swenglish	Sweden	
Taglish	Philippines	Tagalog
Tanglish	India	Tamil
Thailish	Thailand	Tinglish
Vinish	Vietnam	
Wenglish	Wales	
Yinglish	Yiddish	

上記は、世界の各国から英単語に借用された語源（ルーツ, roots）の呼称表現の一部である。

(4) 日本語は「世界の言語」のなかでも外来語の多い言語だと言われる。この外来語を、今日の我々は次の六種類に分類して使用している。

(a) 英単語の音声表記による外来語

アカデミー	：academy	（専門的な、学問・研究をする場所）
アリバイ	：alibi	（不在証明）

(b) 和製外来語（Japlish）

本来の外来語に似通って、日常の生活用語・マスコミ用語として定着して違和感を感じさせないほどに使用されている。しかしながら、これは外国語でなく、日本式外国語なのである。英語の単語を、日本式語順で、コミュニケーション可能な型に組み合わされたものが多くみられる。完全に日本語として定着しており、グローバリゼーションの進展次第では、欧米にこれらの和製英語の逆輸出が見られるかもしれない。

フロントガラス	〈front glass〉	～ [windshield]
ベッドタウン	〈bed town〉	～ [commuter town]
テレビゲーム	〈television game〉	～ [video game]

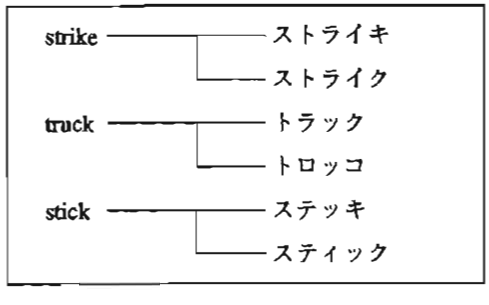
(c) 省略型外来語（abbreviated English）

本来の外国語の一部を利用または省略して用いる外来語のことである。

アパート	〈Apart〉	～ [apartment house]
モーニング	〈Morning〉	～ [morning coat]
モーニング　サービス	〈Morning Service〉	～ [cut-price service during the morning service]

(d) 表記別同一外来語（separate spelling with the same foreign language）

ある外国語に、多くの異なった意味があるとき、カタカナ表記を一部変えて別の外来語として使用される場合のことである。



(e) 漢字混じり外来語（a foreign language with Chinese Character）

漢字に外来語を混ぜて構成された言語表現方法で、生活文化の背景を熟知できてない外国人には理解しがたいものである。

電気ストーブ	(electric heater)
テレビ映画	(television film)
黒ビール	(black beer)
住宅ローン	(housing loan)

(f) 外来語名詞の動詞化

外来語のその殆どは、名詞的な形態であるが、平仮名を組み合わせることにより動詞化に変換させたものである。

ギブアップする	(to give up)
アルバイトする	(to take on another job)
ヒッチハイクする	(to hitchhike)

(5) 外来語表現の増加理由

日本語の表現内容に、外来語の存在が日増しに強く多様化してきた原因には、①IT化によるグローバル化の進展による客観的必然性（国家間のボーダレス化・異文化交流の多様化など）②外国語の語彙の直接的運用傾向③マルチカルチャー浸透による社会生活文化の国際化④国立国語研究所「外来語」委員会主導による「外来語」言い換え提案の徹底効果等が挙げられよう。

(6) 外来語使用についての感覚アンケート調査結果分析（2004年6月実施）

＊調査アンケート対応クラス：英語Ⅰ　（二）42名
英語Ⅱ　（二）43名
TOEICⅠ（二）42名

外来語を使用する利点		英Ⅰ	英Ⅱ	TⅠ	分析
(1)新しいものを感じる	(1)	35.2	40.2	28.2	
(2)話しやすく分かってもらえやすい	(2)	28.4	45.2	35.8	
(3)流行っている言葉を使わないとださい	(3)	17.6	24.5	21.5	
(4)これまでと違った明るい点を感じる	(4)	20.5	12.7	37.6	
(5)利点と想われるものはない	(5)	12.8	5.8	8.9	
(6)分からない	(6)	7.3	4.3	7.0	
外来語を使用する欠点					
(1)流行り廃りが激しいので真意を分かってもらえない場合もあるかもしれない	(1)	42.8	51.5	24.8	
(2)本来の外国語の修得に障害もあるかもしれない	(2)	28.8	24.6	34.6	
(3)ＴＰＯを考えないと、浮き上がってしまう	(3)	32.8	12.8	25.1	
(4)カタカナ語の場合、アクセントが不一致になる	(4)	12.5	18.2	38.2	
(5)欠点と想われるところなし	(5)	10.4	17.3	9.3	
(6)分からない	(6)	6.4	4.3	11.2	
パソコン、ベンチャー、コンビニなどの和製外国語の外来語についての社会現象をどう思うか					
(1)当然の現象で、現実を受けとめる	(1)	40.5	32.5	28.2	
(2)ある程度は良いと思うが、日本語の盛衰が心配	(2)	19.8	27.4	36.1	
(3)外来語か和製かの区別がつかづ好ましくない	(3)	22.5	29.1	42.3	
(4)外国語の修得には、功罪両方が見られる	(4)	16.3	13.0	36.2	
(5)特に何とも思わない	(5)	22.5	25.2	10.8	
(6)分からない	(6)	5.6	8.3	10.3	
外来語を一般的に理解しているほうですか					
(1)よく理解しているほうだと考える	(1)	18.2	15.6	21.2	
(2)あまり理解していないほうだと考える	(2)	58.6	42.5	49.5	
(3)どちらともいえない	(3)	21.2	38.3	26.2	
(4)分からない	(4)	2.0	3.6	3.1	

【分析】

英語Ⅰ＝基礎的能力養成のクラス。真面目に学習に取り組むが、社会的対応で良。

英語Ⅱ＝標準的能力養成のクラス。多読を主眼にした学習体系であり、若干視野が広く、社会的自己分析に余裕が見られる。

TOEICⅠ＝資格力養成の基礎クラス。三クラスの中で、自己意識と到達目標の高い学生が多く、社会性・語学力増進意欲に富んでいるので、それなりのデーター結果を残している。

§3 「小学校教科書に観る外来語・カタカナ語表記の実情」

〈1〉小学校段階における言語教育の現状

文部科学省は「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」からの提言（2000.6.30）を受けて、小学校の「総合的な学習の時間」に英語教育を取り入れる報告書を取り纏めた。2002年度から公立小学校で本格的に実施されることになって、丸3年目の今年度中に、文部科学省の諮問委員会の「中央教育教育審議会」の専門部会から、『英語』を教科として教えるかどうかの結論が出される。

すでに全国の小学校では、「総合的な学習の時間」を使用して、英会話とかさまざまな英語活動の取り組みが始まっている。学習指導要領にとらわれずにカリキュラムを創る研究開発学校制度や構造開発特区制度を活用しての独自の取り組みを始めた小学校も観られれる。

ただ、正式な教科にするには、さまざまな問題点を克服せねばならない。例えば、①教員免許の見直しなど大規模な体制づくりが急務の課題になっている。

さらに問題なのが、②小学校段階での『英語』教育[3]は、どうあるべきか？新たな英語科教員のみに初期外国語教育を任せておくべきなのか？　③小学校の教育内容（カリキュラム）はどのような内容であるべきなのか？　④現行の全国一律の文部科学省の大綱スタイルでいいのかどうか？　⑤小中校の連携カリキュラムはどうあるべきか？　小中高はどうなのか？

さらに、中高大はどうあるべきか？などなど、大所高所的な展望、国際化的な現状答申がなされないまま、さまざまな問題点が山積しているのが今の姿といえましょう。

ここで、『これからの時代に求められる日本人の言語能力』について、次の三項目の指針を示して、次の章（本論）に移りたい。

(1) ユネスコ「文化的多様性に関する世界宣言」(2001年11月)

第5条　文化的多様性を実現する環境としての文化権

〈前略〉したがって、すべての人は、自ら選んだ言語、とりわけ母語によって、自分を表現し、作品を創造し普及させる権利をもつ。すべての人には、文化的アイデンティティを十分に尊重した質の高い教育と訓練を受ける資格がある。人権と基本的自由を尊重するかぎりにおいて、すべての人は、自ら選んだ文化的生活に加わり、自分自身の文化的営みを行なう権利をもつ。

(2)「第22期・国語教育審議会答申」(2000年12月)

価値観や人間関係が多様化し、また情報が氾濫する現代の社会生活においては、主体性を持った個人として、物事を的確にとらえ、自分自身の考えを論理的にまとめ、相手に応じ適切に表現し、必要な場合には建設的に議論して結論を得るといった、コミュニケーションに関わる言語能力が欠かせない。〈中略〉

外国人とのコミュニケーションのために外国語を修得することは有効であるが、日本語を母語とする者の言葉の能力の根幹は、日本語能力の修得によって培われることを忘れ

てはならない。

(3) 文部科学省：小学校英語活動実践の手引き（抜粋・要約）[4]

（内容が多義にわたるため、箇条書きにて要約する）

(a) 理念：国際理解と外国語会話

ユネスコ勧告内容と国際理解教育

①人権の尊重——寛容な心の育成

②他国文化の理解——文化の多様性・世界の多様性

③世界連帯意識の育成——多文化・多言語状況の理解

(b) 目標：What is communication? Why is communication important?

Language is not tool but a way of World.

(c) 自由裁量

ALT，TT（英語担当外国人助手）の活用

小学校における外国語活動：①音声教育活動を第一義とする。

②日本語に直さない

③発音をカタカナ表記に転換しない

④無理に修得させない

⑤誤りを細かく修正しない。

音声教育：ビデオ視聴、ALT／TTの参加、ゲーム／歌等の諸活動

簡単な会話（グループ／ペアワーク活動体験）

(d) 母国語臨界期と外国臨界期と社会の言語環境の有機的関連性

①小学校→中学校への外国語教育の連続性

②音声言語能力→文字言語能力への発展性

③中学校段階での「総合的な学習の時間」における本格的な「国際理解教育の理念」の導入と実践効果

④子供たちの自主性・創造性を促進させる雰囲気環境習慣づくり

⑤子供たちの「言葉への感性と意欲」づくり

☆国際化のなかで肝要なことは、小学校から『英語』を教えるのでなくて、母国語で論理的に考え、積極的に表現できる素養を慈しむことが大切である。その下地に外国語文化が根付くことになる。

〈2〉小学校教科書に観る外来語としてのカタカナ語の使用状況の調査

＊使用テキスト：平成15年度前期小学校教科書（奈良市内公立小学校統一教科書）

調査用教科書（一部抜粋）	出版社	カタカナ語	和製英語
図画工作　1・2	日本文教出版	25	4
3・4	〃	45	10
5・6	〃	54	5
せいかつ　1・2上	大阪書籍	38	3
下	〃	62	4
小学国語　5上	〃	51	6
下	〃	27	2
6上	〃	77	5
下	〃	83	4
わたしたちの家庭科　5・6	開隆堂	205	30
あたらしいほけん　3・4	東京書籍	18	1
新しい保健　5・6	〃	42	5
新しい社会　6上	〃	65	6
下	〃	96	13
新しい算数　5上	〃	40	7
下	〃	29	2
6上	〃	50	7
下	〃	36	2

【分析】

全科目全学年のテキストに掲載されているカタカナ語の表記を調査分析したわけである。その結果、上記の表で明白なように、「家庭科」テキストでの〔使用総数〕が断然トップを占めたわけである。調査前では「国語科」or「社会科」と予想していたわけであるが、見事に読みが外れてしまった。

相対的な感想としては、どの科目も予想外に多量の外来語もしくは造語（和製外来語）の使用実態を認識できたことである。

この結果、§1（4）（a）～（f）の外来語表記分析を参考にして、上記の調査資料を下記のように総括した。

①カタカナ語表現をどのように学習し指導するか。

②カタカナ語は本来は外国語であり、指導教員はそれをどのように認識しているか。

③カタカナ語は日本語の文脈内では、日本語として学習し、学習させるが、教科担当教員としては§1（4）（a）～（f）のどれに相当するのかを事前学習することが必要であろう。

④カタカナ語は、＊1．正規の外国語の音声表記の場合

＊2．正規の外国語のローマ字表記の場合

＊3．＊1の場合、日本語式発音or英語式発音なのかを認識しているか。

＊4．造語もしくは和製外来語なのかを、事前チェックしているか。

＊5．＊4の場合、正規の外国語表記はどうなのかを事前チェックするべきである。

のように、多種多様な使用表現形態があり、教科「英語」として、授業に導入が検討されている段階では、小学校の全学を挙げて、国際理解教育を根底に置いた外国語教育実践が必要ではないだろうか。

＊6．アクセントの位置、イントネーションは？など外来語の語源（社会・文化・言語背景）まで検討チェックすることは肝要なことである。

〈3〉カタカナ語表記の分析

①「b&v」音の同一「バ」表記

「ba&va」音を同一の「バ」音で表記している。当然、アクセントの位置も異なっている。

＊バレリーナ　(ballerina　)

＊バイオリン　(violin　)

②「chi&tchi」音の同一「チ」表記

①の説明様式と同様。

＊チーター　(cheetah　)

＊チームティーチング　(team teaching　)

③「擬音語＋カタカナ語」

小学校の低学年のテキストとか、特に。音楽・図工のテキストに観られる現象。

＊フワフワバルーン　(balloon　)

＊クルビョコシート　(sheet　)

＊出る出るマシーン　(machine　)

＊のびのびアート　(art　)

④「形容詞的／副詞的外来語・和洋折衷版」

日本語を外来語の前後に置いて表現するケース。

＊カラー針金　(color　)

＊仲良くダンス　(dance　)

⑤「省略系和製英語」

日本語では口語表現で、短縮スタイル呼称が流行っている。

＊アルミ缶	aluminium	＊ねんどアニメ	animation
＊デジタルテレビ	desital television	＊パソコン	personal computer
＊パラパラアニメ	animation	＊ハムエッグ	ham and egg

＊ハンカチ	handkerchief	＊リサイクル	recycling
＊ポリタンク	polyethhlene tank	＊ボールペン	ballpoint pen
		＊スーパー	supermarket
＊デパートのビル	department store	＊スタートライン	starting line
＊ペットボトル	PET: polyethlene terephthlate		

⑥「同音意義語の外来語」

日本語では同じ発声をするが、外来語の意味が異なる場合。

＊けしゴム	eraser
＊わゴム	rubber
＊合成ゴム	gum

⑦「英語以外の外来語」

この項目は、予想外に多数の外来語を散見した。下記はその一部である。

(a) スペイン語	カスタネット	castana		
(b) オランダ語	ドイツ	Duitch	ザイル	seil
	ワクチン	vacca		
	ガーゼ	gauze		
(c) ポルトガル語	イギリス	Ingrez	パン	pao
	タバコ	tabco	カステラ	sponge cake
	ボタン	botaon	トタン	tutanaga
(d) 朝鮮語	キムチ	kimuchi		
(e) 中国語	ラーメン	lamian	ギョーザ	jiaozi
	ウーロン茶	oolong		
(f) フランス語	クレヨン	craie	オムレツ	alumette
	レストラン	restaurant	コロッケ	croquette
(g) イタリア語	スパゲッティ	spago	ソプラノ	sopra

⑧「算数におけるアルファベット音声表記」

A～～～Lまで使用され、音声表記で弱音の〈ィ〉音の省略が見られる。I（アイ）の表記が省略されている。多分、1／Iとの混同を避けたものである。

A（エー）B（ビー）C（シー）D（ディ）E（イー）

F（エフ）G（ジー）H（エイチ）＋＋＋J（ジェイ）

K（ケイ）L（エル）

⑨「和製英語」

明確なルールなしに、感覚的に視聴覚的に造語される場合が多く見られる。

＊プロレス	pro- wrestling
＊カフスボタン	cuff links
＊タイムレコーダー	time clock

＊フォートライブラリ	photo library
＊ユニオンプラン	union plan
＊ペットホテル	pet hotel
＊フライ	deep-fried food

⑩「成熟度別外来語」

下記のものは、「せいかつ上」〈1・2年生用〉に掲載されてるものである。

＊おはようなびです	navigator
＊さくひんをぶれぜんとしたいなあ	present
＊はむすたあ	hamster
＊らじおたいそうにいったよ	radio
＊かあどにあなをあける	card

⑪「国名の音声表記」

日本語式発音と実際の発音に差異が見られる。

＊オランダ	Holland/Netherlands	和蘭陀
＊アジア	Asia	亜細亜
＊ヨーロッパ	Europe	欧羅巴
＊ペキン	Peking/Beijing	北京
＊ナンキン	Nanjing/Nanking	南京
＊モンゴル	Mongolia	
＊モスクワ	Moscow	
＊ハワイ	Hawaii	羽合

⑫「注意すべき英語表記」

「新しい社会6上・下」に半数以上掲載されている。

WTO ／ GATT ／ WHO ／ NGO ／ HIV ／
RESTAURANT ／ 3LDK ／ NHK ／ NOx ／
PET ／ AV専門館 ／ UNESCO

⑬「注意すべき英語表現」

アクセントとかイントネーションに留意すべきものがある。

タイ	Thailand	ユーロ	Euro-（money)
オゾン	ozone	ビニール	vinyl
セロハン	cellophane	クレヨン	crayon
モーツアルト	Mozart	メール	mail

〈4〉まとめ

「国際社会における日本語」「国際化に対応した日本人の言語能力の深化」「国際化に伴う外来語・外国語・造語・和製外来語・片仮名言葉表現の増加の問題」など外国間との人・もの・

情報の交流拡大によって、日本語の中で、特に日常生活の中での使用頻度が格段に高まり、認知・理解できにくい状態、所謂、コミュニケーション不足の状態も起こり得る社会情勢[5]になっている。

口語表現から文語表現に拡大利用が安易になされた場合、次の問題点が考えられる。

(1) 片仮名言葉の安易な使用増加から、歴史的に磨かれ潤いある美しい日本語の姿が損なわれる可能性がある。

(2) 片仮名言葉の安易な表記は、原語の意味から剥離して遊離して使用されるケースが多いため、日本人の外国語の学習障害を引き起す可能性が考えられる。

(3) 日本語の場合、第一母音にアクセントを置いて発音する場合が多く、それを真似て片仮名言葉を音声化した場合、意味不明瞭のままで、相手にこちらの真意を伝達できない危険性も起こりうる。

《2》《3》の内容から推測できうるように、問題点としては上記の《4》の (2) (3) の内容が、根本的な解決策を提示していると考える。

さらに、小学校での言語教育は「まず音声言語教育から」との指針を文部科学省が提言している以上、『片仮名言葉の教授法』については、今後の急務の命題として考えていかねばならないと考える。

『外国語を学び始めるのは、早ければ早いほうが良い』という信仰にも似た概念が形成されつつあります。私自身もこの意見に反対はいたしませんが、拙速しすぎると小学校の児童に、かえって『外国語嫌い』の障害を生じさせる危険性が考えられるです。

本稿は、平成15年度の奈良大学研究所助成による成果の発表の一部である。なお、今回のものは、関西大学英語学研究会第18回例会（2004.3.27）において発表した内容に加筆修正を加えたものである。

注

（1）これはWikipedia, the free Encyclopediaからの引用である。加えて§1の概容分析についても参考にさせていただいた。"http://ja.wikipedia.org/wiki"

（2）フリー百科事典「ウイキペディア」の「English」からの引用。

（3）では、世界での英語教育はどうなっているのだろうか？今回は特に英語とはかなり差異のある言語を使う近隣の国について調べてみた。

①韓国での英語教育

教育制度や検定教科書、厳しい受験体制など、教育を取り巻く環境が日本と非常に似ているといわれる韓国では、1997年に小学校で英語教育が導入されている。日本でも2002年度から小学校の「総合的学習の時間」で英語教育の導入がはじまっており、この点についても両国は比較して論じられることが多い。

韓国での小学校英語は、コミュニケーションの基礎となる「会話教育」を主体としており、2004年までにはすべての学級で英語だけの授業が進められるようになる。また今後小・中・高の英語の教科書がすべて会話を中心としたものに移行するとしている点など、「国際理解教育」をめざして導入さ

れた日本の小学校英語とは性格を異にしているといえるだろう。

②台湾での英語教育

1994年に英語の学習開始時期の早期化がはじまり、2001年より台湾全土で実施されている。

国民小学（日本の小学校に相当）での英語教育導入の施行課程において、なにより目をみはるべきなのは、教員採用と養成の政策であるといえるだろう。英語教員の必要数として約3,400人が見積もられ、1999年春には募集試験を実施。合格者は2001年までに360時間の研修に参加し、さらに小学教職課程の履修、1年間の実習期間を経て、現在音声を中心とした実用英語教育を主な目的として教壇に立っている。

③中国での英語教育

隣りの大国・中国では、経済市場拡大の途上にある近年、英語学習熱がますます高まっている。欧米や日本の企業進出が盛んになるにつれ、高収入・合理性から外資系企業への就職に憧れる学生が圧倒的に多くなっているのがその理由だ。

ここで注目すべきなのは、中国では英語力のレベルが収入に直結するという現実である。中国の場合、英語学習熱の背景にあるモチベーションが「経済上のメリット」にあることは、現代中国の英語教育事情を語る場合決して無視することはできない。むろん英語学習の動機のすべてが「英語力＝経済エリート」という図式に帰結するわけではないだろうが、少なくとも現在の英語学習熱の大きな原動力になっていることは間違いない。

（4）文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂

（5）日本経済新聞（2001年1月9日）より引用要約。

就職や昇進にあたり、企業から求められる英語力も高まってきている。2001年1月9日、日本経済新聞にこのような記事が掲載された。

> 日立製作所は全社員約6万人を対象に、昇進の条件として英語能力を測定するTOEIC（国際コミュニケーション英語能力テスト）で、役職ごとに一定の点数をとることを義務づける制度を2001年に導入する。将来の役員、社内分社の社長として選抜される経営幹部候補者の場合、990点満点で、800点をとることが条件となる。海外企業との提携や海外投資家へのIR（投資家向け広報）活動の重要性が増す中で、語学力の向上を通じ国際的な経営センスを磨かせる。企業幹部にこれだけ高度な英語力を要求する例は珍しい。
>
> 役職などに応じて目標水準を定める。採用時で500点、エンジニアや管理部門の事務職などのいわゆる総合職で600点、課長に昇格するには原則として650点が必要になる。
>
> 同社は副事業所長、部長、課長、主任（係長級）相当職の社員を対象に、約2,500人を経営幹部候補者として経営教育を実施している。この候補者に選ばれる条件に、TOEICで800点以上をとることを加える。TOEICによると、800点以上をとるのは全受験者の上位一割弱という。
>
> 産業界では松下電器産業が海外部門の主任（係長級）の昇格条件を650点としているほか、富士通は海外赴任者や海外営業の社長に求めるレベルを730点としている。日立が経営幹部候補生に要求する800点は相当に高い。

参考文献

（1）松川礼子（1997）『小学校に英語がやってきた』アプリコット

（2）大津由紀雄・鳥飼久美子（2002）『小学校でなぜ英語？』岩波ブックレット

（3）田辺洋二（1990）『学校英語』筑摩書房

（4）英語青年9月号（2000）『英語第二公用語化論と英語教育』研究社

（5）和田稔（2000）『小学校英語教育A to Z, Vol 3』開隆堂